talk! talk! talk! 俳優・原田篤さん

俳優

原田篤さん

ドラマ、映画、舞台、バラエティと幅広く活躍中の俳優でありながら、2005年にはタレントプロダクションを立ち上げるなど、バイタリティーにあふれ多方面で活躍する原田篤さん。父親の影響で始めたという写真も、最近ではフォトグラファーとしての仕事をこなすほど本格的に関わっている。原田さんの演技にまで影響を及ぼしたという、写真の魅力をたっぷりと語っていただいた。

プロフィール

ハラダ・アツシ。1978年、愛知県生まれ。1998年に「GTO」（フジテレビ系）でデビュー。その後、数々のドラマや映画、舞台、バラエティなどに出演し、リポーターやキャスターとしても活躍をしている。
主なドラマに「救急隊隊ゴーゴーファイブ」（テレビ朝日系）「仮面ライダー555」（テレビ朝日系）「メモリーオブラブ」（毎日放送系）「貞操問題」（TBS系）「彼女の恋文」（テレビ朝日系）など。
主な映画に「ショムニ」（渡邊考好監督）「恋愛冩真」（堤幸彦監督）「メタセコイヤの木の下で」（櫻井眞樹監督）など。
主な舞台に「さよならの贈り物」（日名子雅彦演出）「暗い日曜日」（松本崚演出）「ガラスのメカ」（IKKAN演出）など。「ガラスのメカ」ではプロデュースも手がける。
2003年に女優の秋本奈緒美さんと結婚。現在は夫婦での番組出演も多い。

Beginning 出会い

写真好きの父 多大なる影響は構図にも表われる！？

いつ頃から写真を始められたのですか？

本格的に始めたのは4年くらい前です。それ以前も、父親が写真好きだったこともあり、ずっと興味は持っていました。幼稚園のころからシャッターを押すだけで撮れるカメラを父から渡されて、親しんでいましたね。幼い僕に、父は「構図はこうした方がいい」とアドバイスもしてくれて（笑）。

まだ幼い原田さんにお父様は真剣に教えてくれていたのですね。

そうなんです。だから自然と大きくなったら絶対写真をやるんだと思うようになっていました。僕が本格的に写真を始めてからも、僕が撮った写真を見て「ここはもうちょっと色が出たんじゃないか？」なんて、父に助言を受けたりしています（笑）。

写真を始められたのは、お父様の影響がとても大きいのですね。

完全にそうですね。最近では構図も父の写真とそっくりだったりするんです（笑）。
カメラを買うときも、どこのメーカーのものにするか迷いはしたんですけど、父がニコンを使っていたことが頭にあったので、やっぱりニコンかなと思って決めました。

D200をご愛用いただいているとうかがいました。

はい、今はD200をメインで使っています。初めはコンパクトのデジタルカメラを使っていました。ドラマの撮影現場などで何気なく撮っていたんですが、スタッフの方達に見せたら「構図がいいからもっと撮って」と言われるようになったんです。僕が撮った写真をドラマのホームページに載せてもらったりもしていました。そういうこともあって本格的に撮りたいと思い、D70を買ったんです。そのうち、仕事でも撮ってくれと言われることが増えたので、D70だけではものたりなくなりD200を買いました。D2XSと迷ったんですが、普段できるだけ持ち歩きたいと考えていたのでD200にしたんです。

仕事としても写真を撮る機会があるということですが、撮影方法などは誰かに教えてもらったりしたのですか？

いいえ、独学ですね。本などを読んで勉強しました。小さいころからカメラは触っていましたし、スッと写真の世界に入っていくことができました。

カメラは毎日持ち歩いていらっしゃるのですか？

そうですね。だいたい毎日、D200と60㎜レンズと魚眼レンズをカバンに詰めて持ち歩いています。

すごいですね！本格的に写真を始めて何か自分の中で変わったことなどはありましたか？

いろいろなものに対しての見え方が確実に変わりましたね。そしてそれが自分の演技にも影響したように思います。たとえば舞台の仕事をしているとき、構図というものを意識するようになりました。自分が舞台上で演じていても、その舞台を客観的に見ることができるようになったんです。舞台上のどの位置にいると、僕たちはどういう構図でお客さんから見えるのかということが分かるようになってきた。
それに、写真を撮るときは被写体に対して集中しますよね。心惹かれたその一瞬を、どの構図で撮るか、どの角度から撮るか、考えて判断する。この瞬間の光で撮らなきゃ、目の前の景色の雰囲気は変わってしまう。そういった一瞬で変わってしまうかもしれないという状況の中での集中力や判断力は、芝居をする上でも重要なんですよね。写真で養われた力を演技で活かすことができるようになり、僕の演じ方も変わったと思います。写真を本格的に始めて１年くらい経ったころ、まわりからも芝居が変わったねと言われるようになりました。

Pleasure 楽しみ

カメラを持つことで感性が働く 世界が広がる

普段は何を撮られることが多いのですか？

特に好きな被写体があるというわけではなくて、その時その時で心惹かれたものを撮っていますね。どこかへ行けば必ず何かしらの出会いがあるので。

きれいな奥様（女優・秋本奈緒美さん）が身近にいらっしゃると撮りたくなったりはされませんか？

そうですね。でも、かちっとしたポートレートというよりは、間抜けな姿が撮りたくなるんです（笑）。寝ているところとか。台所に立っている後ろ姿なんかも撮ったりしますね。

原田さんだけが見られる奥様の姿ですね。持ってきていただいた写真の中では、被写体がクローズアップで撮られているものが多いように思えますが。

そうですね。撮り方としてはクローズアップで撮るのが結構好きですね。60mmレンズで寄って、ものの一部分をアップで撮る。普段何気なく通り過ぎてしまうような、気にかけないようなものでも、ぐっと近づくと見え方が変わるんです。自分の視界では見られないような世界が、カメラを介すことで見ることができとても面白いですね。
あと、たまにカメラを白黒設定にして撮ったりもしますね。犬などの動物って、人間より色の識別ができない、色のない世界を見ているって聞きますよね。だから人間じゃない他の生き物ってどういう風に見えているんだろうと興味がわいて、白黒でも撮るようになりました。そうしたら、白黒とカラーではこんなにイメージが変わるんだ！と驚きが得られました。色を消すことで雰囲気が大きく変わるのがすごく面白いですね。人間の目では世界を白黒で見られないけれど、カメラは見せてくれる。同じ景色を同じ構図でカラーと白黒と両方で撮ってみたりもするんです。色のある世界、色のない世界のイメージの違いを楽しんでいます。

写真をやっていて、何が一番楽しいと感じますか？

何がというよりは、カメラを持っているだけで楽しいですね。このあいだも舞台の本番中に、自分の出番の１分前まで楽しくてずっと写真を撮っていたんです。さすがにちょっと、まわりから“集中しろよ”的な空気が流れてきましたけど（笑）。本当にカメラを持った瞬間から絶えず楽しくてしょうがないですね。撮影しているときじゃなくても、自分が何に興味を惹かれるのか、どんな被写体に出会えるのか、わくわくした気分でいられるんです。だから、逆にカメラを持っていないときは、そういった好奇心や期待感みたいなものが半減してしまいます。

いろいろなものに対してとても敏感になりますよね。

そうですね。カメラを持っているときは、いつでも撮れるぞという意識があるので感性が働く。逆に持っていないときは不安に近いものすら感じます（笑）。持っていないときに撮りたいものに出会ってしまうと、「うわ〜っ」とショックを受けてしまいます。家にいても、寝るときでも、自分の一番近いところに置いておきたい。朝目が覚めてパッと起きたときに、カーテンを開けてすぐ撮りたくなるかもしれないですしね。「なんだこのきれいな光は〜！」パシャ。みたいな感じに。

Photo's 作品紹介

相棒のカメラを通して 原田さんの心を掴んだ光景

1 煙

2 派手なちびぴ

3 マフラー

4 優しさ

5 yome

6 我が父

7 僕もいつかは

8 ハナレウシ

9 その先には

Future これから

今の自分の視点を大切に 写真に残していく

原田さんにとって写真とはどういう存在ですか？

自分を鼓舞してくれるものですね。カメラを持つことでいろいろなものへの興味もわいてくる。たとえば、このあいだ富士山を撮りに行ったんですが、撮影場所を決めて撮った後も、もっと近づいたらどんな景色が撮れるだろうと好奇心がわいて、どんどん富士山に近づいていきました。近づいては撮って、近づいては撮って（笑）。もし写真をやっていなかったら、こうして一人で遠出することもなかっただろうし、富士山はどこから見ても同じだと思っていましたね。自分の世界を広げてくれます。
それに、写真を撮ることが、ストレスの発散にもなって、リラックスできるんです。ずっと仕事続きでカメラを持つ時間が少ないとイライラしてくるくらいです。もう、日々欠かせない存在ですね。

これから撮ってみたいと思うものはありますか？

何かこれが撮りたいというのはないですね。どこかへ行くたびに、いろいろなものに触発されて撮りたいという欲求が出てくるんだと思います。カメラを持つことで、自分の気にしてなかった世界がどんどん広がっていくし、いろいろなものが見たくなりますから。どんなことがあるんだろう、何に会えるんだろうという感じで、その瞬間、その瞬間、気になったものや心動かされたものを撮っていくと思います。
きっと、一年経ったら興味の対象も変わってくると思うので、今の28歳の僕が興味のわいたもの、撮りたいと思ったものを大切にして残していこうと思います。自分の姿は仕事でしっかり映像や写真に残りますから、今の僕の目線で見ている世界を撮っていきたいですね。

なるほど。原田さんのお話を聞いていると、本当に写真がお好きなんだというのがとても伝わってきます。

もうカメラは相棒ですから（笑）。これからもっといろいろなレンズも使いたくなるだろうし、そのたびに新しい出会いをしていくと思うとまたわくわくしますね。

話は戻るんですけど、これからもっと撮っていきたい被写体といえば父と母かもしれませんね。両親は僕や弟が小さかったころからずっと、あらゆる場面を写真に残してくれて、それはすごく感謝しているんです。だから、今度は僕が写真を撮ってあげたいし、できるだけいろいろな場所に連れて行ったりしたいと思っています。
少し前になるんですけど、僕の弟がレストランをオープンさせたんですね。そのときのオープニングパーティーに両親も来まして、ちょうど父と母の誕生月だったので100何人ものゲストの前で、弟がケーキをプレゼントして、僕がその様子を写真に撮ってお祝いしたんです。そんな風にいろいろな場面で両親の写真を撮っていけたらいいですね。

素敵なエピソードですね。ご両親もとても嬉しかったでしょうね。これからの原田さんの写真でのご活躍も、楽しみにしています。

はい。写真の仕事もどんどんやっていきたいです。普段撮っている写真も、将来的には写真集にまとめたいと思っているんですよ。だからこれからもたくさん撮っていきたいですね。

コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.